

「みちのくの巨石調査」

イワクラネットワーク東根

会員 岡崎 武

東根市の地理・歴史概要

果樹王国ひがしね、さくらんぼで有名な東根市は山形盆地の北東部に位置し、東部は山岳地帯、西部は乱川扇状地平野部の扇端に市街地が広がっています。

乱川は宮城県との県境付近を源として最上川の中流域に流れる一級河川で、扇状地の始まりは関山地区悪戸付近である。

現在は国道48号線が通る関山地区は古くから宮城側との交通の要衝の地であった。

市の東部には奥羽山脈が走り、北部は県境から1000m級の山々が約20kmに亘り続いている。

蔵王連峰以北に続く御所山(≒宮城名・船形山)日の出岩・三ツ石などの磐座を確認)、黒伏山(黒伏南壁は幅600m落差300mの垂直に近い断崖が聳え立つ)などが連なり、半分以上は奥深い山岳地となっている。

東根市には国指定の「大けやき(日本一)」や「最上三鳥居」の一つとされる「六田の石鳥居」など

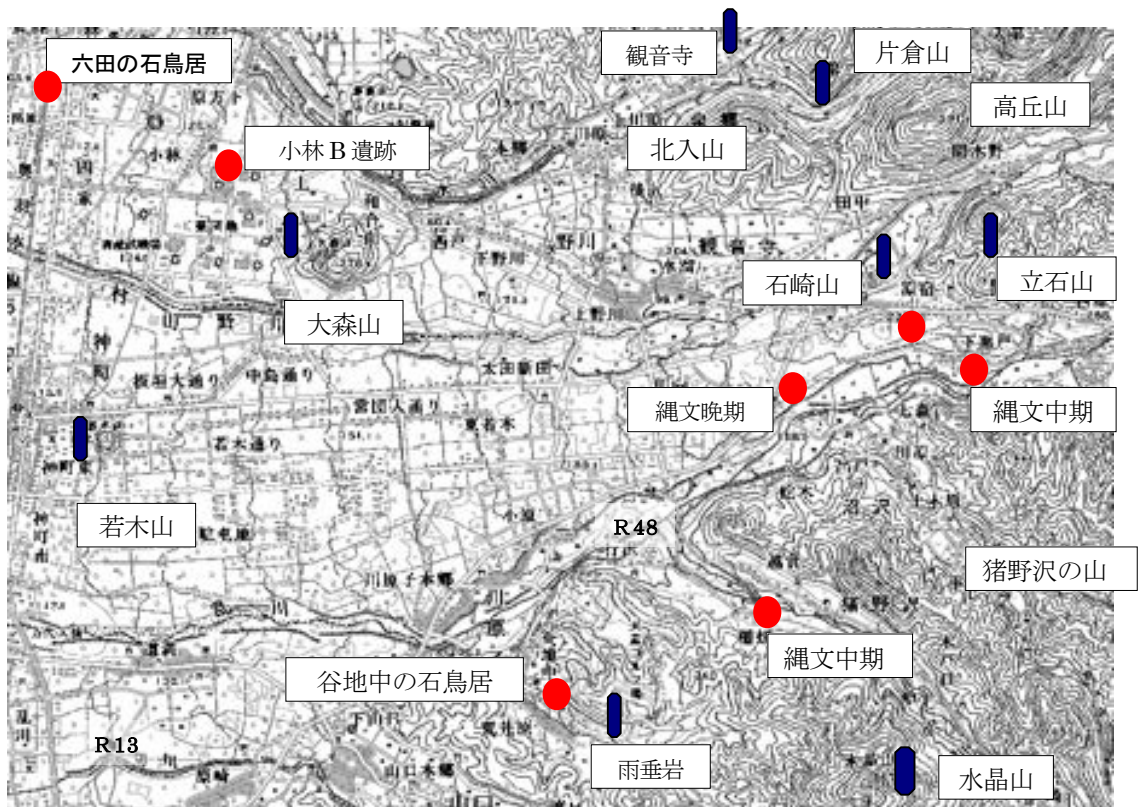


図1 東根市の磐座と縄文遺跡分布

歴史的文化遺産も多く存在しており、「石崎山」の南、向原・悪戸地区からは新期旧石器から縄文晩期にかけて多数の土器類が発見され、さらに

「大森山」北西1.5kmの小林B遺跡からは平野部ではめずらしいという縄文中期の遺跡が発見され、その中には人頭大の川原石を一列に配列した、直径45mほどのストーンサークルも確認されています。

その扇状地の扇端近くにきれいな三角状の大小二つの山「若木山」と「大森山」があります。

扇状地の平野部に単独でぽつんとあれば、磐座を追いかける者としては、どうしてもピラミッドにしたくなる。そうあってほしいと願いたくなるのです。

東根市の南隣は鈴木旭先生の故郷、将棋の駒で有名な天童市、そして同じ奥羽山脈の麓には千百数十年の歴史を持つ「山寺立石寺」の巨石・磐境・磐座群、そして鈴木先生が調査された「山寺」をも内包する天童市の「雨呼山」を中心とする、磐座ネットワークが構成されるところであり、その北側に位置しているため巨

石文化の共同体を形成している可能性が見えてくるのです。

「若木山」 太陽石と妖光伝説

若木山 神町地区

「若木山（おさなぎやま182.6m）」は自衛隊第六師団神町駐屯地の北西側に位置する、高さ約60mほどの小山である。

麓には戦時中の名残として、弾薬庫や指揮本部跡などの防空壕が今も残っており、ときおり市民に開放されている。

また市街地にあるため、市民の憩いの場として、軽い運動や森林浴のために訪れる人々が多いところもある。

地理的位置は関山地区悪戸付近から西方約8km地点、「若木山」付近

の標高は120mで扇状地の扇端（約10km）のほぼ中央部に位置し、西方1kmには国道13号線が南北に走る。（図1参照）

「若木山」は三角状を呈しているがこれは南北から見た場合で、東西からはお椀型となる、かわいらしい小山である。

山頂の太陽石

北側麓の「若木神社」付近から遊歩道が設置されており、西斜面をつづら折れに約5分少々で山頂部にたどり着く。



若木山山頂の太陽石

最終方向へ向きを変えると、尾根の最頂上部に柵を巡らして保存されている丸い石を確認することが出来る。石の上には祠がおかれており、若木権現を祀っていると思われる。

山頂部は約10m四方の広さがあり、そのほぼ中央部には礎石が数個土中に確認される。その中心に径6mの円球状をした岩「太陽石」が据えられています。方角は真南より30度西方向を指している。

夏至と冬至のライン

ここから東西に仰角22度のラインを延長して、冬至と夏至の日の出と日没方向を見てみよう。

まず冬至の日の出方向を確認してみると、約7km地点に頂上に磐座を御神体とする「大和神社」が鎮座する「水晶山」の頂がライン上にびったり重なる。

付近からは水晶を採取したときの破片が時折見つかることもあり、北東にある「黒伏山（1226.7m）」との伝説が残る。

ちよつと大げさですがその延長線上には仙台市青葉区作並の磐山「鎌

倉山(520m)があり、こちらも頂が重なるのだ。ちなみにニッカウイスキーの工場敷地内からその雄姿を見るのが一番のポイントと思われる。近くには仙山線の「愛子駅」がある。

冬至の日没方向は朝日連邦の「大朝日岳(1870.3m)までラインが伸びてしまう。夏至の日の出方向は、観音寺地区の「高丘山(591.4m)」を通り、「黒伏山」へ向かっているが、頂からは若干のずれがある。

付け加えてその反対方向夏至の日没方向には、出羽三山が控えており、ライン上には「姥ヶ岳(1669.7m)」の山頂、そして「湯殿山の御神体」そば(200m範囲か)を通ることとが確認できます。

「若木山」付近に関連する遺跡などは未だ見つけられず、あまりにもスケールが大きいため偶然と言われるのも仕方がない。

ただ、「鎌倉山」と「湯殿山の御神体」は見えませんが、他は全て目視することが出来ます。現代人として考えるならいち早く冬を向かえ真っ

白になる高山を神が降臨する場として畏敬の念を覚えることはないだろうか。

頂上部の配石

「太陽石」の東西の縁10m付近には1m大の石がそれぞれ三個ずつ(二つのもある)配石されており、「太陽石」を中心にほぼ相対的である。また斜面下部には関連するような配石も見受けられるので順に記載する。

西側配石の三つ石から見えていくと三つ石は直線上にあり真南に対して東へ3度のずれがある。そこには天童市の「出羽の三森」があり、北から「人間将棋」が行われる「舞鶴山」中央の「八幡山」そして「越王山」と続いており、そのひとつ「越王山」の頂を標す。

南から順に、それぞれ「太陽石」を経て見ると、「大森山」「石崎山」「水晶山」方向に延長することが確認できた。東西に仰角22度を夏至の日の出の方向とするなら、「黒伏山」方向を指し示しているが、西の三つ石から「太陽石」の中心を通し

た場合、確定できる山や磐座が現段階では見当たらない。

また一番南の石からは南西に向けて斜面下部に三個ほどの石が直線上に列をなしており、しっかりと「大森山」を指している。

では東側の三つ石はどうなのか。ほぼ、西側の三つ石と同角度を



西側三石の南方位石

形成し「太陽石」からみて「大森山」「石崎山」「水晶山」の順に見ることは出来るが、若干のずれがあるので、確かなことは言明できない。また反対の西側方向へも特に見えてくるものはない。

次に南東方向斜面に約50mのなだらかな尾根が続いており、その線上(真南に対し東へ18度)にも1m大の石が数個見受けられる。この方向は「雨呼山」の登山口となる。

天童市奈良沢の不動尊、また天邪鬼が山寺と若松観音に石橋を架けようとしたときの伝説が残る磐座「三ツ石」と林道脇にある「かぐら石」「籠石」「長持石」の三石が見つかっているとある。

太陽石の形から

「太陽石」を円形と表記しましたが、次頁に掲載した写真のように南面は三角状につきでている。その西面はほぼ真南を示しており、ラインは「出羽の三森」のひとつ「八幡山」を通過する。

もちろん北は北極星となるので「若木山」から冬至の頃の南の夜空を見上げれば、「オリオン」の三ツ星が輝く。

そうなると「出羽の三森」はオリオンの三ツ星を投影した姿なのかと頭をよぎるが、三森の距離や方位が



太陽石 南から

若木山の伝説

「若木山」の北側に鎮座する「若木神社」もとは山頂にお社を祭っていたのですが、戦時中に敵機の監視塔が設置され麓に移されている。社殿前の謂れ書きには山形市の歴史研究家武田好吉が、次のように書き記している。

『いづこの国、いづれの民族にあても原始信仰は自然崇拜でありました。ことに岩石や樹木が信仰された事は伊勢神宮にも其の名残をとどめておりますが、ここ若木神社もそうした古代信仰をとどめる我が郷土きつての古い神社であります。縁起によると今から凡そ一千二百年前の昔即ち延暦元年（七八二）四月、天台宗の開祖伝教大師が延国済度のみぎり、此の山の麓に來ると、全山が真赤にかがやき其の赤気が山頂にかかる雲に映じて怪しげな景を呈しております。大師は、じいっと此の景をふり仰ぎ、やがて村の翁をつけて此の山に登り、山頂において修法祈禱を行いますと、忽ち全山を覆ほふ赤気が去りましたが、不思議に

も大師の前に一本の若木がしげり其の下に一個の赤い宝石が置かれておりました。・・・』

「全山が赤く輝き、赤い宝石」というところから岩石の磁力などによる、エネルギー増幅装置のような役目をしていたかのような伝説が残っている。

但し、其の後に記載されている文面は疱瘡などの流行病が治ったので、若木権現を祭ったという言い伝えで、東北一円に信仰が広がり、出羽三山参りの時には必ずここにも立ち寄ったというほど隆盛のあった謂れのある神社のようです。

追記

原稿作成のために新たに現地に赴き確認したところ、「大森山」北西から発見された「小林B遺跡」のストーンサークルは「太陽石」付近から伸びる北東側（真北に対し25度東）の尾根の延長線上にあることが判明した。（遺跡発掘資料からの推測位置で確認）

ちなみに「若木山」南西30度の

線上には山形市西部の人工の山と称される「富神山」（南側に環状列石）を通り、南陽市にある日本三熊野に数えられる「宮内の熊野大社」を通ることとなる。

反対側には奥羽山脈の「御所山」から15km地点に伸びる最西端（「石崎山」より西側にある）の「甌岳（1015.5m）」の頂点を通るラインが見えてくる。

「太陽石」と配石の位置関係やそれぞれ三角山がどのような意味を持つのか、また推測の域を出ていないのが実情である。

「大森山」

目玉紋様と環状列石

大森山

東根地区

「大森山（278.4m）」は標高140m付近から始まり「若木山」の2倍の高さがある。

また、東面は東西に仰角25度で、夏至の日の出方向については「頂上部の配石」の項で記したとおりである。

「出羽の三森」との関係は「雨呼山」とのネットワークがここ東根の磐座をも内包するのだろうか。

「越王山」の頂は「雨呼山」の頂からちょうど真西にあたるのだ。このラインはネットワーク形成に十分とはいえないだろうか。



大森山 水晶山から夏至の日没方向

「若木山」から北東約2km地点にあり、工業団地が造成された東に位置する単独の山で、山頂部には送信用のアンテナ等が数基設置されている。山頂部からは磐座・巨石等は確認できていない。もともと明治三八年頃に畑を耕しているうちに銅製の経筒（十二世紀）が発見され、山頂一体全て掘り起こされているという時代を通して山頂部は利用されている形跡があるので、巨石や磐座を認めることは出来ない。



磨崖仏 五智如来と六地藏

という。

磨崖仏

「大森山」の南麓には大きな凝灰岩がむき出しになっているところがあり幅は60mぐらいか。高さ20m幅20mほどの石切り場跡とホイット穴と呼ばれる洞窟がある。

その前面に未完成の「磨崖仏」があり、上段に四体の如来座像が彫られている。もう一体のスペースがあるがまったく手が付けられていない。その下には六地藏も彫られており十

四世紀頃の作といわれている。

この「磨崖仏」が彫られた巨石は、幅7.5m高さ5m厚さは2.6mであるが、なぜか岩場から4mも離れているのだがそれについては言及されていない。

付近の状況を見てもこれだけの巨石が、四角形に切り取られたような形で、離れて存在することは実に不自然である。

「磨崖仏」を作成するためにわざわざ4mも後ろの岩場から切り離して作るであろうか。もし意図的に切り出して作成したとするなら、かなりの労力と時間を要したであろうし、当時としては有名な？あるいは有力な力を持った作者の意図はどのようなものだろうかと要らぬ心配をしてしまう。

後ろを確認してみました。手が加えたような形跡は認められない。ということとは地質学的に見ると（そんな知識は持っていないのですが）岩石が形成された時期に、その部分だけがぼつんと離れて形作られたものか、はたまた雨風によって自然にその部分だけ残ったとも言えるのだら

うか。そうになると自然の力もかなり個人的なセンスを持っていることになろう。

イワクラ学会会報第3号に掲載された「天乃石立神社」の「前立磐」に似ていると思うのですが、周辺の磐場や巨石等の地理的状況がどうなっているのでしょうか。しかし四面ともほぼ垂直であることが基本的に違っていると感じています。

この巨石、真南に対し西へ5度ずれており、どこを向いているのか検討がつかない、「鏡岩」とすればどのように説明すればよいのだろうか。勉強不足な私としては頭をひねっても、どうなのと思考が停止してしまふ……。今のところ大胆な仮説も出てこない。

諏訪神社

「大森山」北西側には約300m、高さ12mほどの細長いしっぽの様に伸びた丘が続いており先端付近には諏訪神社が鎮座しています。お社ができる以前は、「大森山」を遥拝する祭儀場であったであろうと推測されるのですが、磐がないものと仮定すれば、「大森山」そのものを神が降臨

する場所として崇拝していたのではないかと考えられます。

しかし、お社は現在真西を向いているため、「大森山」ではなく「立石山」方面を遥拝する形になっている。決定付けることはまだ先のようなだ。



鳥居を抜け石段を登って初めに目にするのは社殿正面にある松の木である。その根元には三角状の巨石が土中から突き出ている。高さは約2.5m。根元というよりその巨石に根を下ろしたと言ったほうがよいだろう。

三角形状とくればピラミッドである。詳しい計測は行っていないが、形が良かった事は覚えていいる。結構重要な存在なのかもしれない。

埋もれている部分がどれほどののか知る術もないが、三角状の山を模したものではないだろうか。

松の根が巨石を破壊し、何時の日か崩れ落ちるときが来るでしょう。自然の成り行きはいたし方ないことですね。

目玉紋様

ペトログリフ

境内にはその他に、1m大の石が四個無造作に置かれています。

なんとそこには祈りの紋様である【目玉】がくつきりと刻まれているのです。これほどはつきりと認識できる祈りの紋様を県内では始めて見つけることができました。

凝灰岩の風化しやすい小さな石に残っていたというのもまたうれしいものである。

【目玉】が見ているところ（方向）



が重要であると、鈴木先生がよく言われていたのですが、なんともおかしな雰囲気である。

【目玉】は縦型であるし、方角を確認すると「水晶山」方向を見ているように思える。手前には「磨崖仏」があるのだが、「磨崖仏」の角度が一致しない。あまりに近すぎるのもおかしいと思えるし。どちらも有力な候補ではありえないと思うのですが。

「水晶山」は捨て切れないのですが、いつの頃か境内整地のおり若干移された可能性があるのだ、「大森山」あるいはもしかしたら「若木山」

を見つめていたのかと推測していません。

よく見るとこの【目玉】は横型の【目玉】の中に印された三重のペトログリフだったので。（鈴木先生指摘）

もう一つの石には縦横に線刻（そのように見える）が刻まれており、「十文字」の形が見てとれるが、はたしてどのような意味があるのか。

諏訪神社境内の四つの石はどのような意味を持っていたのか、もともと他にもあったのか確認することは出来ませんが、市街地にある磐座は実に不運な運命にあるようです。

小林B遺跡

「大森山」北西で発見されたストーンサークルの正確な位置確認はまだ行ってないので、「出羽の遺跡を歩く」川崎利夫著より引用することにしました。



「大森山工業団地造成にともない、1974年に大森山北西1.5kmの小林B遺跡から、人の頭かそれより少し大きめの川原石を一列に配列した遺跡が発見された。それは直径4.5mほどの円形にめぐららしい。その円形の遺跡の三次態の1しか発掘できなかつたが、時期は4000年前の縄文中期末に営まれたものである。内部からは長さ1.7mほどの小判形の穴が見つかつて遺跡が、墓穴であった可能性が高い。B」

また列石から7mほど北に4.4m

に3mの長方形を石で区画した遺構が見つかった。その中からは灰や焼土があつたので火を焚いた跡とみられる。

つまり円形の列石内が集団の墓地で、方形の石組み内で葬送のために火を焚いたと跡とも考えられるのである。」

写真を見ても使用した川原石はほぼ同様の形状で部分的に突出している陽石とおもえる石などは見当たらないようです。

大湯の環状列石等と比べると、並べ方や石の置き方などが大変大雑把に見えてくる。「大森山」などに対する祭儀施設として該当するのか、ストーンサークルと思われる位置から地図上で角度を確認してみることにした。

遙拝していたと思われる「大森山」は45度で南東にあり、その延長線はここでも「水晶山」を通る。冬至の日の出方向22度の線上は「大森山の北山麓をかすめ「水晶山」の東側約5km地点に位置する上部がきれいな三角状を呈する「堂木沢山(1003.3m)」を見つめている。

共有ポイントである、水晶山へ冬至のラインが確認できることは、生活の要であつたことは言うまでもないだろう。

形が雑に思えたとしても縄文時代の人々にとってこの場所が、大変重要な祭儀の場であつたことは確実とおもわれる。



石崎山

関山地区

平成十五年五月、地元新聞に掲載されているのを友人に教えられ早速足を運んでみた。

関山地区原宿、国道48号線を仙台方面に向かい、関山街道の山合に入る頃、乱川扇状地の始まりに位置し「黒伏山」の南を流れる村山野川との間に挟まれた峰の西端にあたり、国道からも巨石を確認することができ。

「石崎山(284.6m)」は標高245m付近に位置し、東西に約400m、幅80m、高さ40mほどの細長い小山である。

近年市民の憩いの場として、南斜面には遊歩道が整備され、桜の木が植樹されていきました。また、山頂の巨石遺構の前には鉄骨造りの展望台が設置されており、見晴らしは大変よいのですが、ちょっと残念に思われます。

「石崎山」南500m地点からは、新时期石器時代(下悪戸)、縄文中期(悪戸)縄文晩期(向原)と三箇所遺跡が確認され、自然に対する信仰が連綿と続いていたことは確かであり、この場所が古代からの巨石信仰の中心であつたことは確実であると思われる。

巨石遺構

ピラミッドか

北側に回ると山様は一変し、大変急な斜面である。山裾には道路が新設され、以前には水田の整地が施されているところから、北斜面が削り取られている可能性は捨てきれない。

土台石 露出



方位石
方向

道路から見上げると、とても巨大な磐が重なりあっていることが確認できる。

またこの小山自体が一つの大きな岩盤のようにも見えてくる。その露出部分の長さは約90m、西側は一部垂直の壁(高いところで5m)になっており切れ目がなく一つの磐で

あることは間違いない。

方向は東西に仰角25度、夏至の日の出方向である東側に連なる「立石山」と「黒伏山」方向を向いている。

北側斜面中腹にもいくつかの巨石が確認できるので、巨大な磐を囲むような形で配石されているのではないだろうか。南西麓にも巨石があることで想像は膨らむ。

この山から土をきれいに排除した場合の姿はまさしく巨大なドルメンでありピラミッドではないのかとわくわくしてしまうのだ。

その上部を詳しく見ると、北側面を揃えると、北側面に二重重ねに乗せてある。巨石の間には故意に挟んでいられるように見受けられる石も確認できる。

下段の巨石配置図と写真を見て頂ければ、揃えてあることはお分

かりいただけるであろう。

南面から登って、この上に立った限りでは巨大な石が横たわっているだけと思いがちだが、細部にわたり確認してみると明らかに石組遺構であることがわかる。(配置図の色別の意味は特にない)

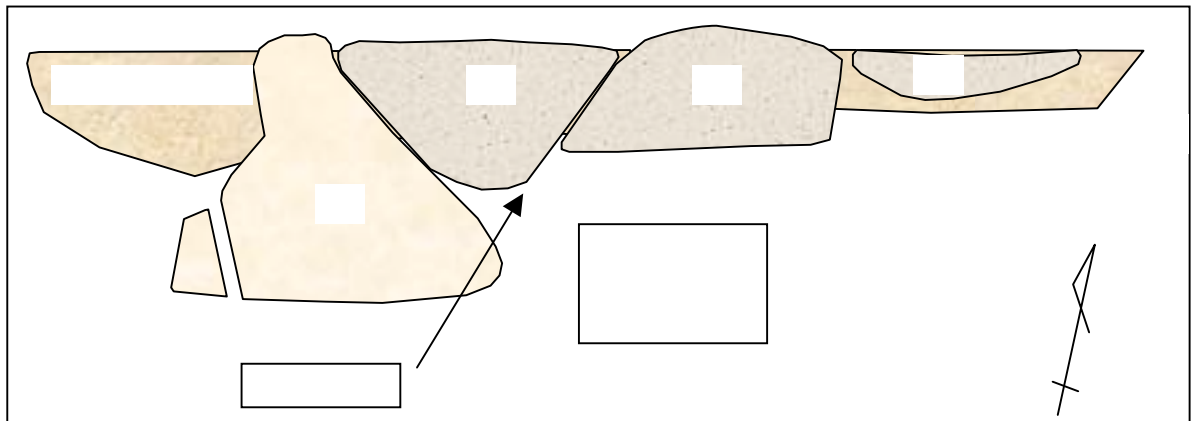
巨石配置と方位石

巨石の配置は下図に示すとおりで、大きさは最上部の巨石東から順に、

A (7.5m x 2m h 1.3m) B (10.3m x 3.8m h 3.3m) C (13m x 8m h 3m) D (10m x 11m) となっている。巨石BとCがこの「石崎山」の最も中心となる磐座であろうと思われる。

巨石Dの西先端は40cmの間隔をおいて四角い(2.9m x 1.8m)磐が据えられており、真南に対して東へ27度傾いている。これは「大畑山(897.7m)」であり「面白山(1264.4m)」方向となる。

では北側には何があるのだろうか。約1km地点に位置する「高丘山(591.4m)」「北入山(442.7m)」のほぼ中間を通り抜け、泉郷にある



観音堂を指している。(ここにも巨石がある。)

「石崎山」を祭儀場とするなら御神体となる山(磐)は東側に連なる三角山の「立石山」となり、更には



奥の院としての「黒伏山」が控えている。

「石崎山」周辺として考えれば縄文時代の祭儀場・磐座・三角山(神奈備山)などを包括する最も有力な候補は「黒伏山」または「御所山」であろうと思われるのだが、「方位石」が指し示すところに何があるのか、

北側をも詳細に調査する必要が出てきたので確認している部分を記しておきます。

泉郷の巨石群

「北入山」の北側には白水川を挟んで泉郷地区の「蔵田山(576m)」があり、南西裾野に沢渡観音堂がある。和銅年間に作成された十一面観音立像が秘仏として安置されている



という。

その境内及び裏山には磐座と思われる巨石や岩場が存在しており「北入山」の頂から観音堂そして裏山の

巨石は一直線で結ばれる。

更に東側に「片倉山」という四角錐の山があり南斜面の裾野から中腹にかけて巨石が点在、組石、立石らしきものを確認した。

そして「高丘山」の北側裾野に神社が鎮座し「北入山」を見ている、その土台は巨石で元は祭儀の場であり、巨石は磐座であった可能性が大きい。(H18.2.27確認)

ピラミッド？

泉郷及び観音寺一带は「立石山」を含めて直ぐ北隣には、村山野川と白水川に挟まれた「高丘山(591.4m)」「北入山(442.7m)」があり、白水川と牛居川に挟まれて尾根の南西先端には四角錐の山「片倉山(422m)」を始め一直線に「不明(480m)」「不明(573m)」の三山が45度で連なる。その線上は「北入山」をも通過する。

そして真南に対峙するのは猪野沢地区の三角山(名称不明510.7m)を通り「水晶山」となり、東側には「堂木沢山」などの見事な三角錐のピラミッド地帯である。

祭壇跡？

「方位石」から西へ80m「石崎山」の西端麓の巨石は、上部が削



り取られたような形跡があり、石碑が数個建立されている。

そのままであるとすれば、祭壇としては十分であり(どうしても現代の感覚で見えてしまう)、ここで祭儀を行っていたと考えるのが妥当ではないだろうか。最下部の巨石の裏にはお堂が鎮座している。

その巨石が面する方向には「大森山」と「若木山」を望むことが出来

ます。

そして「石崎山」から西方に約2km地点には「白山神社」が鎮座する高さ15mほどの「石崎山」をもっと小さくした丘が存在しており、社殿前には1.5m大の石が無造作に置かれている。その南側真下は岩場で稲荷神社が鎮座する。

今のところ関連する要素が見つかっていないがなんとなく気になるところである。

「石崎山」の山頂磐座に対し、西側の巨石が祭儀の場かと考えておりましたが、宮城県塩釜市の浜田さんからの情報で、東側に隣接する「立石山」(475m)の山頂部南面にも巨石が多数存在し、石組遺構やメンヒル・ドルメンなどを確認したという。「立石山」が本殿であるという可能性も出てきたので、雪解けを待つて詳しい調査に入りたいと考えております。

ライン

これまでは「石崎山」の巨石遺構だけで周囲の遺跡や三角山を結び付けていた。しかしここに来て新たな

情報が入り、また新しい巨石群の確認が出来たことで、むやみに引いていた線が確実にイワクラとピラミッドのラインを形成しつつある。

ラインはいまだ蜘蛛の巣のような状況ではあるが、それぞれが互いに共有するポイントも見えてきた。もともとは鈴木先生が地元紙に連載した、「雨呼山」のイワクラネットワークにつられ天童・東根地区を探索し始めたことによる。

これからはそれぞれの磐座や三角山のもつ祭儀形態や機能を分析し、かつイワクラネットワークの確立へ



と進めていきたいと思っております。

《良のライン(45度)》

小林B遺跡のストーンサークル、悪戸地区の縄文遺跡群これを南西に伸ばすと山形市の柏倉・本沢地区を通る。「C」からも縄文遺跡が多数発見され、「富神山」の南麓からは環状列石が発掘されている。そして近くの小字名は悪戸であり「富神山」を含めたピラミッド地帯でもある。これらの符号は何を意味しているのでしょうか。更に延長した場合その線上にも同じような符号が存在するのかな？

まだまだイワクラに関しては若輩者で未調査部分も多く、周囲を見回しても直感はず、まとまった結論も見出せずこのような文章になってしまいました。

山形県内ではそれほど知られていない磐座もなく、捜し歩いてもなかなか

かこれといった磐座に出会うことはできなくて、「富神山」や「千歳山」など三角錐の山が多いため、奈良の「三輪山」のごとく「山形」(山に鳥居と川が表すとおり)という神奈備山の文字通り、ピラミッドが主体なのかなどと考えるようになっていました。

現在確認している巨石・磐座は少しずつ増えつつあります。今回の投稿が私にとってよい機会となりました。調査記録をできるだけこまめに行い、郷土史や遺跡、周囲の調査を重ねこのように文章にしてまとめてみることも、いろんな角度から推測できることを実感しています。

まだまだ確定には至らず未完成ではありますが、皆様のご意見を戴きながら進めていきたいと思っております。

